

## 学習院大学所蔵『万葉聞書』について

—— 解題と翻刻（上） ——

江 富 範 子  
柴 田 清 子

本書は、昭和二十四年三條西家から学習院大学に入ったもので、現在、同文学部日本語日本文学研究室に所蔵されているが、管見の限りでは、これまで紹介されたことのない資料と思われる。以下、その概要を述べる。

袋綴の冊子一冊（紙背文書あり）。三條西家家紋八つ丁子文様を空押しした縹色表紙（縦二六cm×横二一・二cm）。『万葉聞書』という題簽が貼られているが表紙と同じく、学習院大学に入る際に補われたものであろう。本文二十四枚。内題はない。ただちに万葉集巻八の一四五〇番歌から始まり、七丁表まで主に漢字平仮名交り文でもって巻八の和歌一四一首を抄出後、「永正十六 六月十七了」という日付、目録<sup>(1)</sup>が記されている。次いで、七丁裏から十三丁表までは巻九の和歌一〇八首、その後に「永正十六 六 十九日了」とあり、一丁分白紙を挟んで、十五丁表から二十四丁裏まで巻十一の二五八首が同じく漢字平仮名交り文でもって抄出、収録されているが、ここには日付が見えない。每半葉十三行内外。墨校、書入れ、見せ消ち、補入あり。奥書なし。印記なし。総歌数五〇七首。

内題も奥書もなく、『万葉聞書』という書名は仮のものであるが、もともとは巻八以前もあつて、そこに書名があつたのかもしれない。すなわち、本書冒頭一四五〇番歌は春相聞第三首にあたるが、以後、部立名が記されているにもかかわらず、そこに部立名がないこと、また、巻八では春雑歌に相当する歌がないことを勘案すると、もともとはそれ以前もあつたとするのが妥当であろう。実際、目録に見える「屋主<sup>ヤヌシ</sup>真人」は春雑歌一四四二番歌の作者である。また、最後の巻十一の二七八四番歌の後には日付が打たれていないことから、これ以後も続けられた可能性もあろう。

本書の成立を考えるにあたり、まず手掛かりとなるのは、本書が三條西家に長らく保管されていたということと、「永正十六 六月十七了」(七丁裏)「永正十六 六 十九日了」(十三丁表)という日付である。永正十六(一五一九)年と言えば、三條西実隆六十五歳、その息公条三十三歳。実隆の日記『実隆公記』は永正十二年二月三日から永正十六年十二月までを欠いており、この件に関する記述はないが、『実隆公記』によると、実隆は永正八年六月、公条の求めではじめた『源氏物語』講釈を、本書書写の六年前である永正十年六月十七日から再開、七月からは二と七の日を定例日と定め、翌年の二月以降、講釈を再興しており、<sup>(3)</sup>実隆が公条に三條西家の学問を継承させようとしていた時期に相当することが窺われる。

これに加えて、注目されるのは、本書に『歌枕名寄』に関する注記があることである。本書は万葉歌の抄出本といった様相を呈しているが、以下の通り、『歌枕名寄』に関する注記が七箇所見える。

- ① 一四七四 大城<sup>オホキ</sup>の山 右筑紫大城歌也 私名寄無之
- ② 一五三〇 蘆城<sup>アシキ</sup>野 右蘆城野筑前国云々名寄無之
- ③ 一六九五 泉川 名寄無此哥
- ④ 一七四六 手綱の濱 名寄無之

⑤ 一七七二 稲見野 名寄イナミ野 ■ 萩の哥無之可書加歟

⑥ 一八〇九 処女墓 右ヲトメ墓事全篇直答可見也

⑦ 二六七四 朽網山クタミ 名寄無之

樋口百合子『『歌枕名寄』伝本の研究研究篇(4) 資料編』によると、三條西家には実隆以来伝来された『歌枕名寄』があつて、これを親本とするのが細川本とされるが、この細川本と①⑦を比較するに、本書の注記とは異なり、細川本には①②③④⑦はある一方、⑤「稲見野の秋芽子見つつ」は細川本では「印南野の秋見つつ」と「秋」だけで、萩の歌としては存在しないという点ではこの注記と合致していると言えなくもない。また、⑥の「全篇」とあるのは『歌枕名寄』のことであろうが、確かに、細川本はもとより『歌枕名寄』には処女墓の歌は見られない。永正十六年当時、存したであろう三條西家の『歌枕名寄』は、その後、おそらく増補されて行つたのであろうが、それにしても、⑤「可書加歟」⑥「全篇可見也」と言える立場にあるのは三條西家の当主とその後継者に限られ、また、⑥「全篇可見也」と「直答」したという人物が実隆だとすると、その聞き手は公衆ではあるまいか。

既に樋口前掲書に指摘のある通り、『実隆公記』には『歌枕名寄』や『名寄』が度々見え、就中、本書書写の九年前の永正七年三月二日の条に「宗碩法師来、宗哲、宗坡等同道、名寄哥不審所々以愚本之万葉以下比较之帰了(6)」とあり、連歌師宗碩らが連れ立って来訪、『歌枕名寄』中にある万葉歌の不審の箇所を尋ねられた実隆が、所持する『万葉集』等によって比較したことが知られる。周知のように、長享三（一四八九）年五月、実隆は三十五歳で万葉部類書『一葉抄』を著した後も、終生、万葉集研究を続けており、『歌枕名寄』『万葉集』双方に通じている実隆ならではの来訪であつたに相違あるまい。

以上、本書の成立を実隆が主導したものとし、従つてこれを仮題の通り「聞書」と捉えるならば、実隆が講述し、

公条が書写したと推測される。とは言え、本書で、最も重点が置かれているのは万葉歌の訓點であり、本書の内容としては、その他には先述の『歌枕名寄』に関する注記と、語釈が一箇所（後述する）見えるだけである。

先に触れた通り、本書では、和歌の表記は漢字平仮名交り文を主として、注意すべき訓読には、例えば、「穴氣衝」<sup>アナイキツカン</sup>（巻八、一四五四）、「恋宿合歡木花」<sup>コヒスルネフノハナ</sup>（巻八、一四六一）など要所要所に、漢字原文を表記した上で右に片仮名傍訓を付す。その他、「恋しけば」<sup>之家婆</sup>（巻八、一四七一）、「めつらしく」<sup>目類布</sup>（巻八、一六二七）などの振り漢字、「秋はき手折」<sup>レ</sup>（巻八、一五三四）、「開なゆめと」<sup>ッ</sup>（巻九、一七四〇）など、片仮名による送り仮名も見られ、訓読に注意が払われている。その一方で、訓読に問題がない箇所については省略されることも少なくない。

牡牛の三宅の酒にさしむかふ―（巻九、一七八〇）  
<sup>コトヒウシ</sup> <sup>ミヤケ</sup> <sup>アマサカルヒナオサメ</sup>

人となる云々 天離夷治にと―（巻九、一七八五）  
<sup>アサカルヒナオサメ</sup>

といった長歌はもとより、短歌体の場合も

健男の―（巻十一、二三五四）  
<sup>マスラフ</sup>

若月のさやかに（巻十一、二四六四）  
<sup>ミカ</sup>

など、歌の大半が略されている例もある。

本書が依拠した『万葉集』の訓の系統を論じる前に確認しておきたいのは、『一葉抄』完成から三十年後の永正十六年、本書が書写される時点で三條西家にあった自家本『万葉集』と『一葉抄』が依拠したそれとは必ずしも同一ではないということである。実隆が『一葉抄』を編むにあたり依拠した『万葉集』は、文明十七（一四八五）年、宗祇から贈られた十四冊（巻七く巻二十）とその欠本を補ったものとされるが、『実隆公記』によると、その後、さらに整備と校合が進められ、その主なものだけでも、延徳三（一四九一）年九月二十四日の条「萬葉注釈終書写功了」とあつ

て仙覚の『萬葉集注釋』の書写を終えたこと、また、同年十一月十四日の条「抑萬葉集<sup>四冊不足</sup>、十六冊玄清持來、是清蓮花院所持本也<sup>⑦</sup>」とあり、連歌師玄清によって「清蓮花院」（正親町三条実雅）の所持した『萬葉集』十六冊がもたらされたことなどが挙げられる。

本書と『一葉抄』の相違で、まず、注目したいのは、『一葉抄』（巻七～巻二十）では、訓読上問題がある箇所には二種の訓文を記したものが多く、概ね、仙覚本寛元本系統に近い主文に対して、仙覚文永本系統の訓を書入れている<sup>⑧</sup>のに対して、本書の場合は二種の訓文を記したものが次の二箇所しか見えないことである。すなわち、「青山」の「青」右に「アヲ」、左に「オク」（巻十一、二七〇七）、「含」右「フ、メル」、左に「ツホメル」（巻十一、二七八三）の二箇所であるが、前者はそもそも類聚古集と紀州本にそれぞれ二種併記され、また、後者は、仙覚文永本がいずれも、右に「フ、メル」、漢字左に「ツホメル」としており、本書を書写した時点で依拠した一本に元々併記されていた可能性が考えられる。この二例を別にする、と、本書の場合は一つの訓に確定する傾向が強く、従って、本書に見られる訓はおそらく実隆によって取捨選択された結果と考えられる。以下、自筆本『一葉抄』と本書に重出する歌四十八首の中で、明らかな誤写・誤脱、仮名遣い等（本書にも『一葉抄』と同様、特徴的な仮名遣いが見られるが今は措く）の違いを除き、相違の目立つ箇所を『一葉抄』、本書の順に掲出（傍線筆者）し、本書の訓の傾向を見て行く。

① こゝろき物にそありける春霞たなひくときにこひのしけれは（一二三二）

<sup>コ、ロク</sup>情具伎物にそありける春霞たなひく時に恋のしけれは（巻八、一四五〇）

② あわ雪のほとろ／＼にふりしけはならのみやこしをもほゆるかも（二三三八）

あは雪のほとろ／＼とふりしけはならの都しおもほゆるかも（巻八、一六三九）

③ あさもよひきへゆく君<sup>（かカ）</sup>□まつちやまこへらんけふそ雨なふりそね（二六）

朝裳吉木<sup>アサモヨイ</sup>へ行君<sup>マツチ</sup>か信土山<sup>マツチ</sup>―（巻九、一六八〇）

④うちたをるたむの山きり□けきかもほそ川の瀬□浪<sup>けり</sup>さわきける（一六九）

掬手折多武山霧しけきかも細川の瀬に浪のさは<sup>（消）</sup>（ける）（巻九、一七〇四）

⑤ぬはたまのよるきりたちぬころもてのたかやのうへにたなひくまでに（二七〇）

黒玉の夜霧は立ぬ衣手の高屋のうへにたなひくまでに（巻九、一七〇六）

⑥おもやまにかすみたなひきさ夜ふ□□わか舟とめんと□り<sup>（まカ）</sup>しらすも（二三四）

母山に霞<sup>フモヤマ</sup>たなひく（巻九、一七三二）

⑦あすよりはわれはこいん。なほりやまいはふみならしきみかこゑいなは<sup>（いし）</sup>（四九四）

あすよりはわれは恋<sup>ナホリ</sup>んな名欲山石踏平君かこゑいなは<sup>（イハフミナラシ）</sup>（巻九、一七七八）

⑧いつとても恋せぬ時はなけれども夕方<sup>ヌトキトハアハ子</sup>枉<sup>ユウカタマケ</sup>て恋はすへなし（三八〇）

何時<sup>イツトデモ</sup>恋ぬ時とはあらね共<sup>マケテ</sup>夕方<sup>マケテ</sup>恋はすへなし<sup>（無乏）</sup>（巻十一、二三七三）

⑨あらたまのいつとせふれとわかこふる跡なき恋のやまぬあやしき（三二八）

鹿玉<sup>アラタマ</sup>の五年<sup>イツトセ</sup>ふとも（巻十一、二三八五）

⑩ゆけとくあはぬいもゆへ久賢のあまの露霜ぬれにたる哉（二二〇）

ゆけとくあはぬ■いもゆへ久方<sup>アマ</sup>の天露霜にぬれにたるかも（巻十一、二三九五）

⑪をとめら<sup>ヲトメラ</sup>か袖ふる山のみつかきの久しきよゝりおもひきわれは（五〇五）

處女<sup>ク</sup>等を袖ふる山の水垣の久しき世よりおもひきわれは（巻十一、二四一五）

⑫かに山に雲あたなひきおほしくあひみしこらをのちこいむかも（八七）

香山<sup>カクヤマ</sup>に雲位<sup>クモキ</sup>たなひき（卷十一、二四四九）

ハヤ カトマラン

⑬なる神のしはしうこきてさしくもりあめもふらなん君をとゝめん（三一〇）

ナルカミ

雷神のしはしとよみてさしくもり雨のふらはや君かとまらん（卷十一、二五二三）

⑭久かたのはにふのこ屋にこさめふりとこさへぬれぬみにそへわきもこ（三六）

フチカタ

ハニフノ

コサメ

彼方の赤土小屋に霖霖<sup>コサメ</sup>ふり床さへぬれぬ身にそへわきも（卷十一、二六八三）

⑮いもか門ゆきすきかてぬひさかたの雨もふらぬかそをよしにせむ（三八）

妹か門行過かねつ久方の雨もふらぬかそをよしにせん（卷十一、二六八五）

其

これらの例を見て先ず気が付くのは、仙覚本系統の中でも文永本に近いとされる『一葉抄』傍書の訓と本書の訓とが、⑦を除き、ほぼ合致することである。傍書のある『一葉抄』の訓、本書の訓を順に掲出する（括弧内は文永本である。西本願寺本の訓を参考に掲げた）。

⑦「いはふみならし」<sup>イハフミナラシ</sup>「石踏平」<sup>イハフミナラシ</sup>（「イハフミナラシ」、「石」左ニ別筆「イシイ」）

⑧「恋せぬ時はなけれども」<sup>ヌトキトハアハ子</sup>「恋ぬ時とはあらね共」（「コヒヌトキトハアハ子トモ」、「ヌトキトハアハ子」青）

⑪「をとめらか」<sup>ヲトメラ</sup>「處女等を」（「ヲトメラヲ」、下ノ「ヲ」青）

⑫「かに山」<sup>カクヤマ</sup>「香山」（「カクヤマ」）

⑬「うこきて」<sup>トヨミテ</sup>「とよみて」（「トヨミテ」青、漢字左「ウコキテ」、「あめもふらなん」<sup>ハヤ</sup>「雨のふらはや」（「アメノフラ

ハヤ」、「ハヤ」青）、「君をとゝめん」<sup>カトマラン</sup>「君かとまらん」（「キミヤトマラム」、「トマラム」モト青）

『二葉抄』の訓で、主文⑫「かに山」、傍書⑧「アハ子」は、現存する萬葉集諸本に見えない独自の訓であるが、前者を「かこ山」、後者を「アラ子」の誤りと推測すると、『一葉抄』主文は、非仙覚本系統の訓（仙覚寛元本とも一致）

であるのに対して、『一葉抄』榜書と本書の訓は一致して仙覚文永本系統の訓を取っており、これらは、仙覚紺青訓(⑫)大矢本・京都大学本「ク」青)でもある。本書のこれらの訓は、ほぼ西本願寺本と一致しているが、⑬「君かとまらん」だけが、「キミヤ」をとる西本願寺本とは相違し、金沢文庫本(「キミヤトマラム」の「キミヤ」ノ右ニ貼紙別筆「キミカ」・京都大学本(「キミカトマラム」)と一致する。また、⑦だけが、榜書の平仮名訓「いし」を本書「石」<sup>イハ</sup>は採用していないが、「いし」は廣瀬本に見える古次点(西本願寺本にも残る)であり、仙覚による改訓ではないという点で、上記の例とは性格を異にする。本書の採択したこれら仙覚の訓の多くは今でも通用し、⑦「石踏平」<sup>イハフミナラシ</sup>⑪「處女等を」<sup>フトメヲ</sup>⑫「香山」<sup>カクヤマ</sup>は今日、定訓となっている。⑧「恋ぬ時とはあらね共」も多くの注釈書で支持され、⑬「とよみて」も漢字原文「動」に「トヨム」の訓を付けること自体は動かない。仙覚の『萬葉集注釋』の書写を終えた成果とも考えられる。

次に、『一葉抄』の主文と本書が相違する箇所を、以下、榜書の場合と同様に示す。

- ① 「こゝろうき」<sup>ココロキ</sup>「情具伎」(「コ、ロクキ」、「ク」青)、「しけきは」<sup>シケレハ</sup>「しければ」(「シケレハ」)
- ② 「ほとろく」<sup>ホトロク</sup>に「ほとろく」と(「ホトロホトロニ」)
- ③ 「あさもよひ」<sup>アサモヨイ</sup>「朝裳吉」(「アサモヨイ」、「イ」モト青)
- ④ 「浪さわきける」<sup>ナミノサワケル</sup>「浪のさは」<sup>ナミノサワケル</sup>(「ナミノサワケル」、「ノサワ」モト青)
- ⑤ 「よるきり」<sup>ヨリハ</sup>「夜霧は」(「ヨリハ」、「ヨリハ」モト青)
- ⑥ 「たなひき」<sup>タナヒキ</sup>「たなひく」(「タナヒキ」)
- ⑨ 「ふれと」<sup>フレト</sup>「ふとも」(「フレト」)
- ⑩ 「あまの露霜」<sup>アマノロシ</sup>「天露霜に」(「アマツユシモノニ」、「ぬれにたる哉」<sup>ヌレニタルカナ</sup>「ぬれにたるかも」(「ヌレニタルカナ」、「ナ」ノ



右ニ「モ古」

- ⑭ 「久かたの」<sup>ワチカタ</sup>「彼方の」(「ワチカタノ」、漢字ノ左ニ「ヒサカタ」、<sup>ワキモ</sup>「わきもこ」「わきも」(「ワキモ」)  
⑮ 「ゆきすきかてぬ」「行過かねつ」(「ユキスキカネツ」)

『二葉抄』の主文で非仙覚本系統の訓(③⑮以外は仙覚寛元本とも一致)と一致する①「こゝろうき」・「しけきは」③「あさもよひ」④「浪さわきける」⑤「よるきり」⑩「ぬれにたる哉」⑮「ゆきすきかてぬ」に対して、本書の訓①「情具伎」・「しければ」、③「朝裳吉」<sup>アサモヨイ</sup>⑤「夜霧は」⑮「行過かねつ」は仙覚本系統と一致(⑮は仙覚文永本とのみ一致)、①(「情具伎」のみ)③⑤は仙覚紺青訓である。④は、一旦、仙覚文永本と同じく(仮名遣いを除く)「浪のさはける」(漢字原文「波驟祁留」)としながらも、「ける」を「ケリ」と訂正、「浪のさはけり」とするが、こうした訓は現存する萬葉集諸本には見当たらない。「けり」と結んでいるのは藍紙本「なみさわきけり」・類聚古集「なみさはきけり」と二本だけだが、本書は「浪のさはけり」としたのか、或いは、「なみさはきけり」を採用するつもりで、「けり」だけ書入れたのか、不明である。また、⑩「ぬれにたるかも」は、廣瀬本「ヌレニタルカモ」、仙覚文永本である西本願寺本・紀州本・温古堂本で「ヌレニタルカナ」に「ナ」を「モ」とする書人があつて本書の訓と一致するが、仙覚文永十年叙印成俊本には書人がない。

『二葉抄』の主文で仙覚寛元本系統(ただし、仙覚文永本系統の漢字左傍訓は含まない)とのみ一致する⑩「あまの露霜」(京大本「アマツユシモニ」、「マ」ノ下ニ代赭書入「ノ」)⑭「久かたの」(神宮文庫本・細井本・京大本代赭書入)に対して、本書の訓⑩「天露霜」<sup>アマ</sup>に「京大本代赭書入以外の諸本、⑭「彼方の」<sup>ワチカタ</sup>は、廣瀬本、及び仙覚文永本の訓と一致する。

一方、『二葉抄』の主文②「ほとろくに」⑥「たなひき」⑨「ふれと」が西本願寺本はもとより、諸本のほとんど

と一致するのは違って、本書に②「ほとろく」と（漢字原文「保杼呂保杼呂爾」）⑥「たなひく」（漢字原文「棚引」）⑨「ふとも」（漢字原文「雖經」）といった例のあることも見逃がせない。本書と合致するのは、②「ほとろく」とは非仙覚本の紀州本（「ホトロホトロト」）、⑥「たなひき」は同じく非仙覚本の伝壬生隆祐筆本（「たなひき」、「き」右二「ク」別筆力）のみで、⑨は、諸本に例を見ない独自訓である。『一葉抄』に見える独自の訓については、「助詞に関して、萬葉集の本文から離れる、やや緩やかな訓読の姿勢が認められ」、「また動詞の活用語尾に特別の注意を払って」いるとされるが、本書の、動詞の活用語尾の相違する⑥「たなひく」⑨「ふとも」や、漢字原文からはやや離れた②「ほとろく」となどは、依拠した本の訓に従ったとも、或いは『一葉抄』に見られる独自の訓の傾向と軌を一にしているとも考えられる。

また、自筆本『一葉抄』と本書に重出する歌四十八首の中で、合致はしているものの双方、非仙覚本系統の訓である例もある。

⑬あをやきのかつらき山にたつ雲のたちてもゐてもいもをしそ思ふ（九〇）

アヲヤキ カツラキ  
春楊の 葛 山に立雲の（卷十一、二四五三）

双方一致して「あをやきの」「春楊の」（西本願寺本「ハルヤナキ」、五字青）とするが、これは、非仙覚本系統の訓（仙覚寛元本とも一致。ただし、仙覚文永本系統の漢字左傍訓は含まない）であり、嘉暦伝承本・類聚古集書入・廣瀬本・神宮文庫本・細井本と一致する。

仙覚本に従った①「情具伎」⑤「夜霧は」⑭「彼方の」「わきも」⑮「行過かねつ」は今日、定訓となっており、先述した⑦⑪⑫と同様、当時としては一定の成果を上げていると評価されるが、その一方で、②「ほとろく」と（漢字原文「保杼呂保杼呂爾」）④「浪のさは（ける）」（漢字原文「波驟祁留」）と言った漢字原文からは離れた訓のある

（消）

ことも否定できない。

以上、自筆本『一葉抄』と重出する歌四十八首の本書の訓の傾向を見て来た。本書の多くは仙覚の改訓に従う一方、一部に非仙覚本系統の訓や、現存する万葉集諸本に見えない訓も残されている。こうした傾向は、本書全般においてもほぼ同様に捉えられる。詳細は別の機会に譲るが、本書の訓は概ね、仙覚文永本系統に近いものの、その一方で、非仙覚本とのみ一致するもの、例えば「指折て」<sup>テニフリ</sup>（巻八、一五三七）（類聚古集「てにとりて」、墨ニテ「と」ヲ消シテ、ソノ右ニ「を」・廣瀬本「テニオリテ」）、「灼然」<sup>イチシルク</sup>（巻十一、二四九七）（嘉暦伝承本「いちしるく」・廣瀬本「イチシルク」）など、散見するが、非仙覚本系統の訓としては非仙覚本単独の訓は少なく、その多くは、仙覚寛元本系統とも合致するもので占められている。その点、『一葉抄』の依拠した本文に近いとも言えるが、本書には、それよりも多様な訓が認められ、諸本に見えない独自訓もある。これは、本書の訓が取捨選択された結果示されたものであるとすれば、当然の帰結であろう。

最後に、一箇所だけ見える語釈<sup>(10)</sup>について述べておきたい。「松反四臂<sup>マツカヘリシヒニ</sup>てあれやは三栗の中にいてこすー」（巻九、一七八三）に続けて「釈かゝり」（十二丁裏）とあるのがそれである。上二句「松反りしひてあれやは」<sup>(11)</sup>は今日でも難解とされている。この上二句を、大伴家持の「放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌」の反歌「松反りしひてあれかもさ山田の翁がその日に求めあはずけむ」（巻十七、四〇一四）の上二句が模したとされるが、橋本進吉が甲類の「ひ」である「しひ」（一七八三番歌「四臂」、四〇一四番歌「之比」）<sup>メシヒ</sup>は盲目、耳しひのことであり感覚を失うことであろうとする説を発表された。<sup>(12)</sup>これについては諸注、従ってはいえるものの、初句「松反り」については今なお決着がつかっていない。本書に「かゝり」とあるのは、おそらく「松反り」の「反り」を「かゝり」（鳥がとまる）の意と捉えたのではないか。『日葡辞書』に「Tacaga qini cacaru.（鷹が木にかかる）鷹が木にとまる」<sup>(13)</sup>とある他、「かかる」

は 次を示す通り、多く、鷹が木にとまることを表している。

ふたつありけるたかの、いらこわたりをすると申しけるか、ひとつのたかはとまりて、きのすゑにかゝりて侍ると申しけるをきゝて

すたかわたるいらこかさきをうたかひてなほきにかへる山かへりかな

(山家集下・雑・一三八九)

ともすれば木居にかかれるあらたかの手なれぬほどをあはせつるかな

(文保三年御百首・冬十首・一六六六・為藤)

はしたかの木ゐにかかりてくらす日はわれも家ぢにかへりかねつつ

(兼好法師集二〇三)<sup>(14)</sup>

先述の橋本は「松反り」を鷹詞と関連づけ、「鷹が鳥屋にゐて、夏の末から冬の初にかけて、羽毛の抜けかはるのを鳥屋がへりといひ、山にゐてこれをするのを山がへりといふから、松に居て羽毛の抜け代りをするのを松がへりといふのであらう<sup>(15)</sup>」とした。本書も、おそらく鷹との関連で捉えたのであらうが、その解釈がいかなるものであったかは語釈の他に知りようがない。が、橋本説のように「松反り」を「鳥屋がへり」「山がへり」と同様に解したところで、二句とのつながりがわからない。「反り」を「かかり」の意とし、松にとまっているとする本書の解釈は、今日でも意義のある指摘である。私案を述べると、右の和歌の例で言えば、「山がへり」(巢鷹と違って、山で毛変わりした後捕らえられた鷹)と言ひ「あらたか」(新鷹)と言ひ、鷹狩の鷹としてはまだ未熟な鷹が本分を忘れ、木にとどまって飛行しようとしないうことを意味しているとするならば、一七八三番歌は「中上り来ぬ麻呂といふ奴」、四〇一四番歌は鷹を逃がした「さ山田の翁」を、いずれも、鷹でもないのに「松かへり」、松の木にとどまってじっと動かない役立たずと揶揄したと解されるのではないか。

以上、本書の紹介と、抄出された万葉歌の訓の傾向を中心に論じて来た。本書には内題も奥書もないが、「永正十六

六月」という日付から三條西実隆と公条父子にかかわつての著述と推測され、『一葉抄』以後の三條西家の萬葉学の展開を今に伝える貴重な資料と言えよう。『歌枕名寄』に関する注も当時のありようを知る上で貴重である。最後に、御所蔵本の翻刻掲載を御許可くださり、閲覧・調査に際して種々御高配を賜った習院大学日本文学研究室の御厚意に対し、深く謝意を表する。

#### 注

- (1) 「目録」と言っても訓読上、注意される歌人名のみ摘出したものである。
- (2) この間、東京大学史料編纂所『三条西実隆画像と実隆公記』（一九九六年十月）に、永正十三年四月十三日に実隆公記別記「出家仮名記」が見えるのみ。
- (3) 『実隆公記』巻五之下（統群書類従完成会、二〇〇一年四月）によると、永正八年六月四日条に「朝間桐壺巻讀之、相公発起、連々可講也」、同六日条「午後帚木巻講之」、同八日条「帚木巻講尺」、同十一日条「午後講帚木巻、今日終功以上三ヶ度」とあり、公条の発案で『源氏物語』桐壺巻、帚木巻を講じたことが知られる。また、同書永正十年六月十七日条「源氏講尺始之、自七月二十七讀之」、永正十一年二月十二日条「源氏講尺再興、初音」とある。
- (4) 同書研究編第三部第二章「細川本所収万葉歌―朱の書入れをめぐって―」（和泉書院、二〇一三年二月）。
- (5) 細川本文は渋谷虎雄『校本詞枕名寄本文篇』（桜楓社、一九七七年三月）に拠る。
- (6) 『実隆公記』巻五之上（統群書類従完成会、二〇〇一年三月）。
- (7) 以上、『実隆公記』巻二之下（統群書類従完成会、二〇〇〇年十二月）。
- (8) 以下、『一葉抄』に関する記述や本文、歌番号は、中世万葉集研究会編『三条西実隆自筆本『一葉抄』の研究』（笠間書院、一

九九七年二月）に拠る。なお、同書では仙覚寛元本を神宮文庫本・細井本の二本とし、京大本代赅書入はその範囲外に置いたが、近年、京大本代赅書入を寛元本の一本と把握する田中大士「万葉集京大本代赅書き入れの性格―仙覚寛元本の現形態」（『國語國文』第八十一巻第八号、二〇一二年八月）、同「万葉集仙覚寛元本の底本―京大本代赅書き入れと仙覚本奥書からの考察」（『上代文学』第一一三号、二〇一四年十一月）に従い、京大本代赅書入を仙覚寛元本の訓として扱った。なお、煩雑を避けるため、『一葉抄』における訓の異同については割愛した。詳細は、同書、岩下武彦・江富範子・小川靖彦「自筆本『一葉抄』の訓について―萬葉集古訓との対照―」を参考にされたい。

（9）注（8）参照。

（10）二七八四番歌左注に「鶏冠草<sup>カワアキ</sup>」について「類聚古集」依此義者可和月草歟」とあるが、仙覚文永本に記されたものをそのまま書写したと見て、ここでは取り上げない。

（11）以下、『万葉集』の本文は小学館新編日本古典文学全集本に拠る。

（12）東京帝国大学国語研究会発表（一九四一年十一月二七日）。澤瀉久孝『萬葉集注釋』巻九に拠る。

（13）土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（一九八〇年五月）。

（14）和歌の引用本文と歌番号は『新編国歌大観』（CD-ROM版、古典ライブラリー）に拠る。

（15）佐佐木信綱『評釋萬葉集』第六卷（六興出版社、一九五三年五月）所引。

解題は江富範子が担当した。

〔付記〕 貴重なご意見を賜った査読委員の先生方に心より御礼申し上げます。

## 翻刻 学習院大学所蔵『万葉聞書』

### 凡 例

- 一. 学習院大学所蔵『万葉聞書』を可能な限り原本に忠実に翻刻した。
- 一. 翻刻に当たっては、次のような方法を取った。
  1. 一行の字詰、字の高さ、字の大小は、概ね原本に従った。
  2. 漢字・仮名の区別をはじめ、宛字、仮名遣い、送り仮名、振り仮名などは、全てもとの通りとした。ただし、漢字・仮名の区別にあたり、本文が漢字原文か仮名書きかを判断しかねる場合（例、一四六一番歌「夜るは」の「夜」）、後考に備え、漢字で示した。
  3. 原本の誤字、脱字、衍字などは、そのまま翻刻した。
  4. 漢字の字体は、概ね校本万葉集の異体字表に準拠しつつ、原本の一々の場合に近い正字体または常用漢字字体にし、二、三原本の字体のままにした。
  5. 仮名字体は、現行の仮名字体とした。
  6. 虫損、汚損などにより判読不能な場合は、□を以て示した。その際、原字の一部が見え、概ね判読可能な場合は、□右傍に（―）括弧を設け、その文字を（カ）と注記した。
  7. 補入記号のある補入は、概ね原本通りの体裁で示した。
  8. 消した文字は（―）括弧で囲み、上または傍に（消）と注記した。重ね書きによる訂正は、翻刻本文には最終の文字を記した。塗抹した文字は■で以て示した。当初の文字が概ね判読可能な場合は、左傍もしくは右傍に＊を付し、脚注で補足説明をした。その他、説明を要する箇所については、同じく左傍に＊を付し、脚注で補足説明をした。
  9. 丁数は、各表裏の区切りに「」印を施し、その右に丁数を意味する数字と、オ（表）・ウ（裏）の略号を以て示した。
- 一. 翻刻本文の上段に、検索の便を考えて、『国歌大観』（旧編）の『万葉集』歌番号を付した。
- 一. 翻刻本文は、江富範子と柴田清子が協議の上、作成した。

情具伎物にそありける春霞たなひく時に恋のしければ

水鳥の鴨の羽色の春山のおほつかなくもおもほゆるかも

短哥

玉手次——夕されは鶴の妻よふ難波かた

波上ナミノウヘ従みゆるこ嶋の雲かくれ穴氣衝アナキツカシ相わかれなん

此花の一与ヒトヨのうちに百種モ、クサのことそこもれるおほる力かにすな

やとにある桜の花は今もかも松風はやみつちにちるらん

世間（は）も常にしあらねはやとにある桜の花のちれる比かも

戯奴ワケ変云（消）かためわか手もすまに春の野にぬける茅花そ御食メシて

肥座コエマセ

ひるはさき夜るは恋宿合飲木花君のみみんな和氣さへにみむ

吾君に戯奴ワケは恋らし給有茅花タマイタルを■雖クヘト■喫弥イヤヤセ瘦にやす

わかもこカ形見の合飲木は花のみにさきて盖ケタシ□□□□ぬかも

春霞輕引山タナヒクのへたゝれゝは

夏  
(春) 雑歌

ほとゝきすいたくなゝなきそ汝音ナカコヘを五月の玉にあひぬくまでに

神なひのいはせの森のほとゝきす



ほととぎすなかる國にも去てしかそのなく聲をきけはくるしも

———聲きく小野の秋風にはき(消)の(消)さきぬれや聲のともしき

物のふの——山の常影トカケに

恋之家婆しけはかたみにせんと我やと(消)の(消)うへし藤浪今さきにけり

橘の花ちる里の——片恋しつゝなく日しそおほき

いままかも大城オホキの山にほととぎすなきとよむらんわれなければとも  
私名寄無之けあ

### 右築紫大城山歌也

何奇毛ナニシカモコハク幾許恋る時鳥なく聲きけは恋こそまされ

獨みて物おもふよひに郭公コトノハ従ヨ此間コノマなきわたる心しあるらし

我屋との花橘イツシカモの何イフカシ時毛珠イフカシにぬくへくそのみならなん

しのひのみをれは鬱悵イツカシなくさむと出立イテタチきけはきなく日晩

わかせこか屋との橘花をよみなく郭公みにそわかこし

### 家持唐棣花哥一首

夏儲ナツマケテ而さきたる波祢受久方ハネスの雨打ふらはうつろひなんか

我屋との花橘はちりすきて珠にぬくへく實に成にけり

ほととぎすまてときなかくす（かぬ）あやめ草（花）玉にぬく日をいまた遠トラみか

宇宇の（卯）花の過は惜ヨシミかほととぎす雨間アマ、消ををかす従コ此間コノマなきわたる

「一ウ

\*声点 平平上

1497 1496 1495 1492

君か家の花橘は成にけり花の有時にあはまし物を  
あしひきのこのま立八「十」一ほとゝきすかく開始て――  
わか屋とのなてしこの花さかり也手折て一目みせんこもかも  
つくはねにわかゆけりせはほとゝきす山ひことよめなかましやそれ

夏相聞

事しけみ君はきまさすほとゝきすなれたにきなけ朝戸ひらかん

夏野のしけみにさける姫由理のしらぬ恋はくるしき物を

ほとゝきすなく岑のうへの宇の花の獣事あれや君かきまさぬ

五月のや花橘を君かため珠に(消)此こそぬけちらまくおしみ

(はカ)

1502 1501 1500 1499

■わきもこか屋との垣ウチのさゆり花ゆりといへ□不歌ウタハヌにカキる

短哥

1507

我屋とに百枝刺おふる橘玉にぬく云々 銅鏡マスカハミ

1511 1510

なてしこはさきてちりぬと人はいへとわかしめし野の花にあらめや  
夕されはをくらの山に鳴鹿はこよひはなかくすいねにけらしも  
家持

秋雑哥

「二才

1530 1529 1528 1527 1526 1525 1524 1522 1521 1520 1517 1516 1514 1513 1512

經タテもなく緯ヌキもさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね

今朝アサケの旦＊カリカネ■鴈＊之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心痛いたし

秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれは

秋山キハムに黄＊反木＊の葉のうつろへは――

味酒ウマサカの三輪ハフリの祝＊か山てらす――

### 短歌

牽牛ヒコホシは織女タナハツメト等天地の別れし時由ユ云々青浪ノソミハに望＊たえぬ

しら雲反哥になみたはつきぬ云々さにぬりの小船もかも云々

風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ  
多夫手タフテにもなけこしつへき天漢へたてればかもあまたすへなき

天漢イトカハ伊刀河浪はたゝねとも――

袖ふれはミモカハシツヘク近けれと――

玉蜻蜒カゲロウノホノカ髣髴にみえてわかれなは

牽牛のつま迎舟ムカヘこき出らし――

霞立イカヨフ天の河原に君待と伊往還程モノスツに裳欄ぬれぬ

○天河浮津ウキツの浪ナミ音ヲトさわくなり(らし)わか待君し船出すらしも

娘部思秋芽子ヲミナヘシハキましる蘆城野アシキはけふをはしめて万代にみん

学習院大学所蔵『万葉聞書』について

\*モト「鷹」カ

右蘆城野筑前國 云々 名寄無之

珠匣葦木の河をけふみれは万代までにわすられめやも

草枕たひ行人もゆきふれはにほひぬへくもさける芽子かも

伊香山野へにさきたる芽子みれは君かやとなる尾花しそ思

をみなへし秋はき手折玉梓の道去裏と為乞兒

我せこそ何時曾今かと待なへに――

暮に相て朝面羞 隠野の萩はちりにきもみちはや續也

秋の野にさきたる花を指折て可伎数ふれは七種の花

芽の花。乎花葛花。瞿麦の花。姫部志又藤袴 朝兒の花

秋の日の穂田を鴈之鳴 闇に夜の穂杼呂にもなきわたるかも

今朝のあさけかりかね寒み聞しなへ野への淺茅そ色つきにける

吾岳に棹牡鹿きなく先芽の花つま問にきなくさをしか

秋の露は移なりけり水鳥の青葉の山の色付みれは

織女の袖續三「更の五」更は河瀬のたつはなかつともよし

妹許とわか行道の川のあれは附目つゝむと夜そふけにける

1547

棹鹿の芽に貫をける露の白珠――

晩芽子歌

1548

さく花もウツロハうきを奥手なるなかき心に猶しかすけり

乎曾 古本

1549

いめたてゝ跡見の岳邊の瞿麦花。総手折われはもてゆかん

なら人のため

秋芽のちりの乱呼たてゝ鳴なる鹿の聲のはるけさ

時まちて落る鐘礼の雨やみてあさかの山の――

夕月夜心もしのにしら露の置この庭にきりくすなく

皇の御笠の山の秋黄葉は――

秋立ていくかもあらねはこのねぬる

秋田かる借廬もいまたこほたねは鴈かね寒し霜もをきぬかに

あすか川逝廻岳之秋芽子は――

鶉鳴ふりにし里の秋芽子を思人とちあひみつるかも

秋萩はさかり過るを徒にかさしにさゝてかへりなんとや

いもかめを始見埼の秋芽子は――

学習院大学所蔵『万葉聞書』について

「三ウ

1561

吉名張<sup>フナハリ</sup>の猪養<sup>シカイ</sup>の山にふす鹿の――

ツケ

秋付は尾花かうへに置露のけぬへくもわれはおもほゆるかも

我屋との一村萩を――

久方の雨間もをかす雲かくれなきそ行なる早田<sup>ワサタ</sup>鴈かね

雲かくれなくなる鴈の行てゐん秋田の穂立<sup>ホダチ</sup>しけくしそ思

雨隠<sup>アマコモリ</sup>情鬱<sup>ロイフ</sup>悵<sup>カシ</sup>――

こゝにありて春日<sup>カスカ</sup>やいつこ雨障<sup>アマサハリ</sup>――

春日野にしくれふるみゆあすよりはもみちかさゝん高圓の山

此岳<sup>フミ</sup>にをしか履おこしうかねらひかもかくすらく君ゆへにこそ

今朝<sup>アサナキ</sup>鳴てゆきしかりかね――

朝戸あけて物思時に白露のをける秋萩みえ喚<sup>ツ</sup>雞<sup>ニ</sup>もとな

さをしかの来立<sup>キタチ</sup>鳴野の秋萩は――

布將<sup>シキアミン</sup>見<sup>ト</sup>我おもふ君は秋山のはつもみちはに似てこそありけれ

平山<sup>ナラ</sup>の峯のもみち葉――

1587 1588

あしひきの山の黄葉はこよひかも浮ていぬらん山川のせに  
平山<sup>ニホ</sup>を令<sup>ハス</sup>丹黄葉手折きてこよひかさしつちらはちるとも

「四才

「四ウ

1623 1622 1621 1618 1615 1614 1605 1602 1599 1598 1595 1594 1592 1591

黄葉<sup>ス</sup>の過<sup>ス</sup>まくおしみ思<sup>ス</sup>とち

然<sup>タ</sup>不<sup>ナ</sup>有<sup>ラ</sup>五百代小田<sup>イホシロ</sup>をかりみたり<sup>(田)</sup>廬<sup>フセ</sup>に居<sup>レ</sup>ハみやこおもほゆ

佛前唱歌

しくれの雨まなくなふりそ紅に丹保へる山のちらまくおしも

右冬十月——田口朝臣<sup>タノクチノ</sup> 東人置始<sup>ライソメノ</sup>連長谷<sup>ナカタニ</sup>

秋芽子の枝も十尾<sup>トワ、ニ</sup>二をく露の——

さをしかの朝たつ野への秋芽子——

さをしかの胸別<sup>トヨム</sup>にかも秋芽子の

山ひこのあひ響<sup>トヨム</sup>まで妻恋にしくなく山——

高圓の野への秋萩此比の曉露にさきにけんかも

秋相聞

九月<sup>ナカツキ</sup>の其始鴈<sup>ハツカリ</sup>の使にもおもふ心はきこえこぬかも

大乃浦<sup>オホノ</sup>の其長濱<sup>ユタケク</sup>による浪<sup>ユタケク</sup> 寛<sup>ユタケク</sup>きみをおもふこの比

玉にぬきけさてはらん秋芽子のうれ<sup>ワ、</sup>ラ葉<sup>(消)</sup>にをける白露

わか屋との芽子の花さけり見にきませ今<sup>フツカ</sup>二日はかりあらはちりなん

我屋との秋の芽さく夕影に今もみてしかいもか<sup>スカタ</sup>光儀を

我屋<sup>モミツルカヘ</sup>とに黄変蝦<sup>テ</sup>手<sup>ミツルカヘ</sup>みることに——

学習院大学所蔵『万葉聞書』について

「五才

1625 1624

わかマケル蒔ワサタ早田ホタチの穂立カヅカつくりつるカヅカ縹ワサホそみつゝしのはせわか  
せ  
わきもこワサトか業カヅラつくれる秋の田の早穂カヅラの縹ワサホみれとあかぬかも

家持攀非時藤花并芽子黄葉二物賜坂上大嬢

天平十二年

六月作

歌二首

我屋トキナラヌとの非時目類藤布のめつらしく今もみてしかいもエマヒか咲容を

長哥

1629

叩イタミク々物オムカヒを思へは云々夕には床うちはらひ云々山鳥こそは  
峯向オムカヒにつまとひすといへ云々

1630

たかまとの野への容花カホハナ面影にみえつゝいもはわすれかねつも

1634 1633

手■でもすまにうへしはきにやかへりては――

衣手ミシフに水漉ミシフ付まで■うへし田を引板はへわれはへ（はへ）まもれるくるし

尼作頭句并家持所詠尼續末句等和一首

さほ河の水（消）（の）を塞セキあけて■うへし田を 尼作

かる早飯ワサイヒはひとりなるへし 家持續

冬雑哥

「五ウ



1636

大口の真神の原にふる雪は甚イタクなふりそ家もあらなくに

1637

元正天皇御製  
波太すゝき尾花逆葺黒木もてつくれる屋とは万代までに

聖武

青丹吉ならの山なる黒木もてつくれる屋とはをれとあかぬかも

沫雪のほとろ／＼とふりしけはならの都しおもほゆるかも

吾岳にさかりに盛にさける梅花のこれる雪を乱マカヘつるかも

あは雪にふられてさける梅花君カリか許やはよそへてんかも

棚霧タナキリあひ雪もふらぬか梅花

天霧アマキラス之雪もふらぬか灼イチシロク然此五柴ノイツシハにふらまくをみん

1644

引よちて折らはちるへみ梅花袖にこきいれつ染ツまはそむとも

十二月シハスにはあは雪ふるとしらぬかも梅花ツホメさく含ツらすして

今日イソヒふりし雪に競て我屋との冬木の梅は花さきにけり

池の邊の松の末葉にふる雪は五百重イホエふりしけあすさへもみん

松影のあさちかうへのしら雪を――

冬相聞

高山タカヤマの菅の葉しのきふる雪けぬとかいふも恋のしけゝく

酒盃に梅花うけて思共とちのみての後はちりぬともよし

官ツカサにも縦ユルシたまへる今夜のみのまん酒かもちりこすなゆめ

右酒者官ノ禁制ニ併京中閭里不レ得ニ集宴ハ但親々ヘラ一ニ一ニ

飲樂ハ聴許者縁此和人作此發句焉

真木のうへにふりをける雪の――

梅花アラシちらす冬風の音にのみ

あは雪のけぬへき物を今まてになからへぬれはいもにあへるそ

あは雪の庭にふりしきさむき夜を手枕まかすひとりかもねん

永正十六 六月十七了

# 目録

屋主ヤヌシノ真人

藤原夫オトシ人

小治田ヲハリタノ廣瀬ノ王

刀理トリノ宣令ノフヨシ

石上イソノカミノ堅魚カツ

大伴書持ノフシモチ

奄君イホノキミ諸立タチ

縁達ヨリユキノイクサカ師

典鑄正イモノノカミ

日置ヒロキ

大伴利上トシカミ

像見カタミ

六人部親王モトヘ

賀係ヨシツキ

角朝臣ツノ廣辨ナリ

宿奈丸スクナ

他田ヲサタ

1680 1678

1677 1676 1675 1673 1672 1671 1670 1669 1668 1666 1664

第九

忍壁皇子  
ヲシカヘノ

雑歌

ゆふされは小椋の山にふす鹿――

朝霧にぬれにし衣ほさすして独や君□山ちこゆらん  
シラサキ サキクアリマデ

白埼は幸在待大船に真梶繁貫又かへりみん  
シハヌキ

三名部ノ浦しほなみちそね――

朝開滂出てわれは――  
アサヒラキ

湯羅のさき――白神の磯――

黒牛方塩干の浦を紅の玉裙す(そ)引行はわかつま  
クロウシカタ (消)

風莫の濱のしら浪――紀伊國  
カサナキ

藤白の三坂をこゆと

せの山にもみち常敷――  
トコシク

山とにはきこえも行か大我野の竹葉かりしきふせりをりとは  
オホカノ タカハ

「セウ

木の國の昔弓雄の響矢もて鹿とりなひく坂の上にそある  
ムカシユミヲ カフラ シカ

朝裳吉木へ行君か信土山――  
アサモヨイ マツチ

詠仙人形

常シ<sup>トコ</sup>へニ夏冬ゆけや 裘<sup>カハコロモ</sup> 扇はなたす山にすむ人

いもか手をとりにて引ようち手折わかゝさすへき花さけるかも

春山はちりすくれとも三和山はいまたつほめり君待かてに

河の瀬<sup>タキル</sup>の激をみれば玉藻かもちりし乱てある川とかも

ひこ星<sup>孫</sup>のかさしの玉のつま恋に乱にけらし此川の瀬に

白鳥の鷺坂山の松影に――

焱<sup>アフリホス</sup>千人もありやもぬれきぬを家にはや□ん<sup>タビノ</sup> 羈<sup>シルシニ</sup>の 印

ありそ邊<sup>ツキテ</sup>に 著<sup>アマカラヒト</sup> 榜尼杏人の濱をすくれば恋しくある也

高嶋のあと川浪は驟<sup>サワケ</sup>ともわれは家おもふたひねかなしも

客にあれば三更<sup>ヨナカラ</sup>さしててる月の高嶋山にかくらくおしも

我恋ふる■いもにあはさす玉□浦<sup>(ノカ)</sup>に衣かたしき獨かもねん

玉くしけあけまくおしき<sup>アコラ</sup> 恹<sup>アコラ</sup>夜を――

細比礼<sup>タクヒレ</sup>の鷺坂山のしらつゝし――<sup>管 白</sup>

妹か門いり泉川の床なめにみ雪のこり<sup>れ</sup>いまた冬かも

家人のつかひなるらし春雨のよくれとわれ□ぬ<sup>(をカ)</sup>らすと思へは

巨椋<sup>オホクラ</sup>の入江響なりいめ人の

金風の山吹の瀬のなるなへに

「八才

\*モト「無」カ

■\*  
名  
寄無此哥

さ夜中と夜はふけぬらし鴈かねの――

いもかあたりしけきカリカネ苅音夕霧に

ウチタフルタム

球手折多武山霧しけきかも細川の瀬に浪のさは(けり)  
(消)

冬木成春部を恋てうへし木エの

黒玉の夜霧は立ぬ衣手の高屋のうへにたなひくまでに  
ヤマシロ

山代の久世の鷺坂

春草を馬咋山

御食むかふ南洲山ミナフチの巖にはちるなみたれか波  
(消)つりのこせる

わきもこか(泥塗)赤裳アカモ泥塗うへし田をかりてをさめんクラナシ倉無の濱  
モ、ツテ

百傳の八十の嶋廻を傍くれと粟の小嶋はみれとあかぬかも

瀧のうへの三船の山より秋つへにきなきわたるはたれよふこ鳥

樂波の平山風サ、ナミの海ふけは釣するあまの袂ソテカヘル変みゆ

しら浪の濱松の木の手酬タムケ草いく世までに(消)か年(の)へぬらん  
ミツカハノ

三川の淵瀬もおちす左提サテさし(て)

吉野川河浪たかみたきの浦をみすかなりなん恋しきまくに

河蝦なく六田ムツタの河の川楊の

古イニシヘの賢サカシキ「人のあそひけん吉野の川原みれ□□かぬかも

1730 1729 1726

難波かた塩干に出て玉藻かるあまのをとめらなかな□さね(告カ)

暁の夢にみえつゝ梶嶋の石イハコス越浪のしきてしそ思

山品イハタの石田の小野のはゝそ原みつゝや君か山ちこゆらん

母山フモヤマに霞たなひく

たか嶋のあしりの海を

わかたゝみ三重の河原の礪のうらに

山高みしらゆふ花に落たきつ夏みの川と――

大瀧オホタキを過て夏みにそひてゐてきよき川瀬□みるかさやけさ

詠上総末珠名娘子一首 并短哥

水長鳥シナカトリあはに継ツキたる梓弓末の珠名は胸別ムネワケの云々 端正ウツクシケサに

詠水江浦嶋子一首 并短哥

春の日のかすめる時に墨吉の岸に出ゐて釣船来の云々 水江の浦

嶋の兒の堅カツ魚釣鯛釣ヨツリタイツリカネテナスカ矜マデ及レ七セ日家にもこすて海界ウミキハを過て

榜行に云々 世間之愚ヨノナカノシレタルヒトノ人之。云々けふのことあはんとならは此篋ウツを開クな

ゆめと云々 家を出て三歳ミトセの程に墻もなく家滅ウツセめやと此篋

をあけてしみては云々玉クシケスコシアクル篋小披に白雲の箱より出て常世トコヨへに

「九才

「九ウ

1741

棚引ぬれは立「走」リ云々わかゝりし皮も皺<sup>シハ</sup>みぬ黒かりし髪も  
白斑<sup>シラケ</sup>ぬ

常世に住へき物を釧<sup>ツルキタチ</sup>刀わか心からおそやこの君

1742

見河内大橋獨去娘子

級照<sup>シナデル</sup>や片足羽河<sup>カタアスハ</sup>の左丹ぬりの大橋<sup>サニ</sup>のうへ從紅<sup>ユ</sup>の赤裳すそ

ひき山藍<sup>アヒモテ</sup>用するきぬきて云々若草のつま<sup>カ</sup>（し）あるらん<sup>カシノミノ</sup> 榎<sup>ノ</sup>實<sup>ミ</sup>

獨かぬらん

1744

前玉<sup>サキ</sup>の小埼<sup>ヲサキ</sup>の池に鴨<sup>ハネキル</sup>そ翼霧<sup>ハネキル</sup>をのか身にふりをける霜をはらふとに

あらし

1746 1745

三栗<sup>ミツクリ</sup>の中にむかへる曝井<sup>サラシキ</sup>の

○遠妻<sup>タカ</sup>し高<sup>タカ</sup>にありせはしらすとも手綱<sup>タカ</sup>の濱<sup>タカ</sup>の尋ねきなまし<sup>名寄無之</sup>

1747

春三月諸卿大夫等下難波時哥

白雲の龍田山の瀧上<sup>ヲクラ</sup>の小按<sup>ヲクラ</sup>の嶺にさきをせる桜の花は山高み云々

1748

最<sup>ホツ</sup>■末枝<sup>エ</sup>には云々

吾ゆきは七日はすきし龍田彦<sup>ヒコ</sup>勒<sup>■</sup>此花<sup>ユメ</sup>を風にちらすな

1750

反哥

暇<sup>イトマ</sup>あらはなつきひわたり向峯<sup>ムカツラ</sup>の桜の花もおらまし物を

学習院大学所蔵『万葉聞書』について

難波經宿明日還来――

河副<sup>カハソヒ</sup>の丘邊<sup>ヲカ</sup>の道に

検税使大伴卿登筑波山――

衣手<sup>ヒタテ</sup>の常陸國<sup>フタナミ</sup>の二並の筑波の山を云々  
熱<sup>アツケキ</sup>に汗<sup>アセ</sup>かきなけて  
云々委<sup>マク</sup>曲<sup>ハシニ</sup>

詠霍公鳥

鶯<sup>カイコ</sup>の生卵の中に霍公独うまれて己父<sup>サカ</sup>に似てはなかつ己母<sup>サカ</sup>に似  
てはなかつ卯花の云々橘<sup>キ</sup>を居<sup>キ</sup>ちらし

反哥

搔霧<sup>カキキヲ</sup>し雨のふる夜を――

登筑波山哥――

草枕云々つくはねにのほりてみれば尾花<sup>ニヒハリ</sup>ちるしつくの田井に

鴈かねも寒くきなきぬ新治<sup>ニヒハリ</sup>の鳥羽<sup>アヅミ</sup>の淡海も秋風に

反哥

つくはねのすそ<sup>廻</sup>はの田井に秋田かるいもかりやらんもみち手折<sup>ラ</sup>な

登筑波嶺為嬬歌

鶯の住つくはの山の裳羽服津<sup>モハキツ</sup>の其津のうへに云々人もことゝ

「十ウ



1761 1763  
へ此山を牛掃神のむかしより

詠鳴鹿歌

三垣の山に秋芽子の云々

倉橋の山をたかみか――

七夕哥

1764  
久方の天漢に上瀬に珠橋わたしくたり湍に舩うけすへて

雨ふりて――

1765 1766  
天漢きり立わたり旦今日くとか待君か舩出すらしも

わきもこはくしろにあらなん左手の吾奥の手にまきていなましを

十一才

1770 1772  
三諸のや神のおはせる泊瀬川水尾のたえすはわれわすれめや

○をくれるてわれはや恋ん稲見野の秋芽子見つゝ<sup>い</sup>なんこゆへに

右大神大夫任筑紫國時作 名寄イナミ野<sup>■</sup>萩の哥無之可書加歟

神なひの神より板にする杉のおもひもすきす恋のしけきに

泊瀬川夕渡りきて――

○絶等寸の山の峯上の桜花――

君なくはなと身将装飭くしけなる黄楊の小梳もとらんともせず

あすよりはわれは恋んな名欲山石踏平君かこえいなは

鹿嶋郡――

1780 牡牛コトヒウシの三宅ミヤケの酒にさしむかふ――

反哥

1781 海津路ウミツチのなきなん時もわたらん――

1783 松反マツカヘリシヒ四臂■ニであれやは三栗の中にいてこす――

釈シカかゝり

贈入唐使歌

1784 海若のいつれの神を齋祈タムケはか往方ユクサも来方クサも舩のはやけん

神龜五年秋八月哥

1785 人となる云々アマサカルヒナオサメ天離夷治にと――

反哥

1786 みこしちの雪ふる山をこえん日はとまれるわれをかけて小竹シノはん

天平元年

1787 虚蟬の云々石上ふりにし里に紐とかすまるねをすれはわか■キたる  
衣はなれぬ

天平五年

秋萩を妻とふ鹿こそ云々タヒ客にしゆけは竹珠タカタマを密シメにぬき  
垂タレイハヒ齋戸に

反哥

客人の屋とりせん野に霜ふらはわかこはくゝめ天の鶴群ツルムラ

思娘子作

白玉の人のその名云々下檜ヒ山下行水のうへにいてす――

反哥

垣保なす人の横辞ヨココトしけきかも――

立かはる月かさなりてあはされは――

挽哥

いもらかりいま木の山

塩氣たつあら礒にはあれと

ふるき家にいもとわかみし黒玉のくろ牛かたをみれはさふしも

玉津嶋礒のうらまのまなこにも

過足柄坂――

小垣内ヲカキウチ之麻アサを引ヒキほし云々白細シロタヘの紐ヒモをもとかす一重エゆふ帯

を三重ゆひ

過葦屋處女墓時作

古の益荒マスラフトコ丁子の云々あしの屋のうなひをとめの

学習院大学所蔵『万葉聞書』について

「十二才

反哥

いにしへの小竹田をのこの妻とひしうなひをとめの奥つきそこれ

哀弟死去——

父母か 云々 朝露のけやすき命 云々 黄泉のさかひに

「十二」

はふつたの各々向く天雲の——十六の 云々 葦垣のおもひみたれて  
春鳥のねのみなきつゝ味澤相

反哥

あしひきの荒山中にをくりをきて——

詠勝鹿真間娘子——

鶏鳴——かつしかのまゝのでこなか麻衣に青衿きて

反哥

かつしかのまゝの井みれは

見菟原処女墓——

あしの屋の——焼大刀の手かひをしねり白檀弓鞆とり負  
水に入火にもいらんと 云々 完串呂 云々 如「己男尔まけては  
あらしと懸佩の小劔とりはき冬叙積つら

■私

直答

右ヲトメ墓事全篇可見也

永正十六 六 十九日了

十三才

(本学名誉教授・本学大学院研修者)